細菌戦部隊員の戦後

731部隊・100部隊を始めとした細菌戦部隊で活躍した研究者たちが、どの様な業績を残し、
又戦後をどの様に生きたのかを書く事は、過去の事を暴き立てるようで良くない事かも知れません。
しかし一切の事が秘密にされ、免責や処罰も受けずに、戦後知らん顔をして第一線で活躍したのです。
その結果ミドリ十字がエイズの血液製剤事件を起こした事を思うと、やはり分かる限り書いてみようと思います。
まずエイズで問題を起こしたミドリ十字の流れを書きます。

＊内藤良一 	陸軍軍医学校防疫研究室が空襲を避けるため避難していた新潟出張所も731部隊同様終戦と同時に崩壊しましたが、所長の内藤良一の奔走で東芝生物理化学研究所新潟支所として活動を再開しました。 内藤良一が支所長、金子順一（風船爆弾にペスト菌を載せる研究の中心で、後に東大伝染病研究所）の技師長に就任しました。 この支所は戦後の衛生環境の悪化の中、業績を伸ばし、1950年東芝から分離し、1979年には電気化学工業グループに入りました。 1982年にはデンカ生研と社名が変わり、エイズ検査試薬やワクチン（インフルエンザワクチン）のメーカーになっています。 内藤良一はアメリカで学んだ乾燥血液の技術を生かして、1943年救世軍の校舎を借りて乾燥血漿の製造を始めました。 その後この仕事は東京都血漿研究所を経て、1949年日本製薬㈱に受け継がれました。 日本製薬で乾燥血漿を担当したのは元731部隊の国行昌頼です。 その後内藤は大阪で開業医をしていましたが、1950年11月宮本光一と二木秀雄の協力で大阪城東区に「日本ブラッド・バンク（日本血液銀行）」（のちのミドリ十字）を作りました。
＊宮本光一	日本特殊工業社長。陶器爆弾や石井式濾水器を製造していた。　日本ブラッドバンク取締役
＊二木秀雄 	731部隊で主として結核菌・性病の研究者として生体実験を行った。731部隊二木班班長、731部隊総務部企画課長、右翼系政界誌「政界ジープ」の発行者である。日本ブラッドバンク設立当初取締役。

※直接関係はありませんが昭和37年に日本中を騒がせたサリドマイド薬害事件がありました。
その時の厚生省に薬務局長だった**松下廉蔵**氏はサリドマイド裁判の終了後、ミドリ十字に天下りし社長になりました。

日本ブラッド・バンク（日本血液銀行）は1954年には名古屋にプラントを設置しました。
所長は元731部隊の**野口圭一**です。

続いて東京にプラントを作りましたが、その所長は部隊長を務めた**北野政次**です。
1957 年京都プラントが出来て元 731 部隊の**大田黒猪一郎**が所長となりました。
1964 年 8 月 28 日、社名がミドリ十字に変わり、新薬を次々と開発していきました。
731 部隊の戦後にミドリ十字が深く関係していることはお分かりになったと思います。
厚生省エイズ研究班の**安楽英**はまだ東大の医師の頃、**内藤良一**との協力関係が出来ました。
また厚生省薬務局長の**松下廉蔵**がミドリ十字に天下りしたのもこの頃です。
そしてミドリ十字は血液製剤によるエイズや肝炎を始めとした薬害を次々と起こします。

そこでミドリ十字を含め元 731 部隊員の戦後を見てみます。

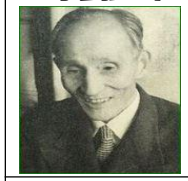
＊石井四郎 	（当時）731 部隊第 1 代、第 3 代部隊長、軍医中将（1920 年　京都帝国大学医学部卒業） （戦後）アメリカとの裏取引で免責され、ソ連の追及もアメリカに守って貰い、新宿区若松町で旅館経営。 1959 年 10 月 9 日　死亡　69 歳　　葬儀委員長は北野政次

「ミドリ十字関係者」※日本ブラッドバンク→ミドリ十字（1964 年社名変更）→吉富製薬→三菱ウェルファーマ→田辺三菱製薬

＊北野政次 	（当時）731 部隊第 2 代部隊長、軍医少将 （戦後）日本学術会議南極特別委員、文部省百日咳研究会、日本ブラッドバンク東京プラント所長、ミドリ十字顧問
＊内藤良一	（当時）陸軍軍医学校防疫研究室　石井に最も近い人物とされる （戦後）1950 年日本ブラッドバンクを共同設立、内藤医学研究振興財団を設立。その財団の理事にエイズ事件の安部英（たけし）がいる。ミドリ十字会長
＊二木秀雄	（当時）731 部隊企画課と第 1 部第 11 課の結核班に所属、技師 4 等 （戦後）日本ブラッドバンク共同設立、右翼系政界誌「政界ジープ」の発行者、多磨霊園の精魂塔の建立に大金拠出。「政界ジープ」恐喝事件の主犯、3 年間の刑に服する。出獄後、新宿ロイヤルクリニック開設、日本イスラム教団設立
＊野口圭一	（当時）731 部隊第 4 部第 2 課でペスト・脾脱疽等の細菌製造、軍医少佐 （戦後）日本ブラッドバンク名古屋プラント所長

＊大田黒猪一郎	（当時）731 部隊第４部野口班、ペスト・脾脱疽の研究、岡 9420（南方軍） （戦後）日本ブラッドバンク京都プラント所長、ミドリ十字常務取締役
＊宮本光一	（当時）７３１部隊ではないが、石井が開発した器具機械を製造した日本特殊工業の社長 石井と癒着して利益をあげ、石井の裏金作りに協力したといわれる （戦後）日本ブラッドバンクを共同設立
＊小山栄二	（当時）東京帝国大学農学部卒、731 部隊員ではなかったが、陸軍糧秣本廠の研究者として黒穂菌を風船爆弾に乗せる「糧秣本廠１号」の研究をしていた。 （戦後）日本ブラッドバンク常務取締役

次は戦争中細菌戦部隊及び組織に属していて、戦後、国立予防衛生研究所をはじめとした国の機関に関係した人です。
注：国立予防衛生研究所は、現在、国立感染症研究所）

＊朝比奈正二郎	（当時）731 部隊第１部第９課（水棲昆虫）長　発疹チフスワクチン製造、技師５等 （戦後）国立予防衛生研究所衛生昆虫部長
＊小林六造	（当時）慶應大教授、北里研究所部長、理事、副所長兼任、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 （戦後）国立予防衛生研究所 初代所長、国立癩（らい）研究所長
＊小島三郎 	（当時）東京帝国大学伝染病研究所教授、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託、栄 1644 部隊に 1941 年と 1944 年に訪問している。サルモネラ菌の研究 （戦後）国立予防衛生研究所 第２代所長、文部省百日咳研究班員
＊柳沢謙	（当時）陸軍軍医学校防疫研究室嘱託、乾燥 BCG を作る （戦後）国立予防衛生研究所 第５代所長
＊福見秀雄	（当時）陸軍軍医学校防疫研究室嘱託　　インフルエンザ （戦後）国立予防衛生研究所 第６代所長、文部省百日咳研究班員 （注）1951 年、国立東京第一病院に入院中の乳児たちに、両親に告知や許可を受けずに大腸菌を飲ませる実験を行なった
＊村田良介	（当時）1644 部隊、軍医大尉 （戦後）国立予防衛生研究所 第７代所長
＊北岡正見	（当時）栄 1644 部隊 （戦後）国立予防衛生研究所ウイルス・リケッチア部長の後、４代目副所長
＊堀口鉄夫	（当時）731 部隊嘱託 （戦後）国立予防衛生研究所勤務

＊安東洪次	（当時）731 部隊大連支部長、ワクチン製造部門を統括、技師２等 （戦後）東大伝染病研究所教授、実験動物中央研究所所長、文部省百日咳研究班員。武田薬品顧問
＊江島真平	（当時）731 部隊第１部第４課長　赤痢研究、技師５等 （戦後）国立予防衛生研究所血清学部
＊八木沢行正 	（当時）731 部隊第２部八木沢班班長で植物菌の研究、技術少佐 （戦後）国立予防衛生研究所、　日本抗生物質学術協議会理事
＊若松有次郎	（当時）100 部隊部隊長 （戦後）国立予防衛生研究所所員、日本医薬
＊浅沼靖	（当時）731 にて流行性出血熱の原因をダニと特定 （戦後）文部省資源科学研究所
＊植村肇	（当時）731 部隊 （戦後）文部省
＊黒川正身	（当時）栄 1644 部隊 （戦後）国立予防衛生研究所で一般検定部長
＊山下嘉明	（当時）栄 1644 部隊１科、軍医大尉　金華支部長 （戦後）厚生省新潟検疫所長
＊貞政昭二郎	（当時）731 部隊病理研究班 （戦後）原爆障害調査委員
＊篠原岩助	（当時）731 部隊人体解剖班、衛生大尉 （戦後）国立都城病院付属江東看護学院
＊長友浪男	（当時）731 部隊、軍医少佐 （戦後）厚生省公衆衛生局・精神衛生課長として旧優生保護法強制不妊手術を管轄後、北海道庁衛生部長から北海道副知事

自衛隊

＊増田美保	（当時）731 部隊航空班所属のパイロット、薬剤少佐・・・1941 年の中国湖南省の常徳細菌戦では自ら飛行機を操縦して、空中からペストノミを撒布し、常徳市と周辺農村地帯に、7000 名以上のペストによる犠牲者をもたらした。 （戦後）1951 年に警察予備隊に入隊、防衛大学校教授
＊近喰秀大	（当時）栄 1644 部隊（中支那防疫給水部）1 科長、軍医中佐 （戦後）1952 年に保安庁に入隊、防衛大学校教官で衛生課長。1644 部隊において研究したペストノミについての詳細な研究報告を基にした学位論文により、戦後、慶応大学から博士号を授与される。
＊神子謙	（当時）ビルマ防疫給水部軍医 （戦後）厚生技官を経て、1953 年に入隊し、防衛技術研究所
＊金原節三	（当時）陸軍省医務局医事課長・・・細菌戦を指導していたのは、陸軍参謀本部、陸軍省医務局医事課である　金原は、「金原業務日誌摘録」で細菌戦部隊からの報告を記録している。 （戦後）1955 年に陸上自衛隊に入隊、第４代陸上自衛隊衛生学校長　※衛生学校は 1952 年 10 月に発足
＊井上義弘	（当時）9420 部隊（南方軍防疫給水部）陸軍軍医学校教官、陸軍省医務局課員 （戦後）1953 年復員省から保安庁に出向、陸上幕僚監部衛生課長、第５代陸上自衛隊衛生学校長
＊中黒秀外之	（当時）731 部隊大連支部員、9420 部隊 （戦後）1955 年陸上自衛隊札幌病院長、第６代陸上自衛隊衛生学校長
＊園口忠男	（当時）731 隊軍医少佐、1940 年の寧波細菌戦の輸送指揮官 （戦後）部隊の研究をもとに博士論文「赤痢菌族の分類に就て」を熊本医科大学に提出、博士号が授与される。金原衛生学校長の要請で１９５６年に自衛隊に入隊し、衛生学校教育部教官（第４科長）、陸上自衛隊衛生学校第８代校長
＊高橋三郎	（当時）731 部隊軍医少佐 （戦後）「衛生学校記事」編集委員、衛生学校教育部第３科所属（２等陸佐）
＊佐伯実	（当時）731 部隊航空班衛生大尉 （戦後）航空自衛隊２等空佐
＊木村直正	（当時）栄 1644 部隊 1 科 （戦後）防衛庁勤務

大学、研究機関、企業関係

＊田中英雄 	(当時）731 部隊第２部実施研究の昆虫班班長 ペストノミの研究、技術中佐 約 70 人以上を人体実験した。ネズミの習性に関する研究やネズミを使ったノミ繁殖研究 （戦後）大阪市立医科大学長、兵庫医科大学で教鞭

＊笠原四郎	（当時）北里研究所から 731 部隊第 1 部第８課長　リケッチア・ウイルスの研究、技師４等 （戦後）都立豊島病院、北里研究所病理部長
＊石川太刀雄丸 	（当時）731 部隊第 1 部石川班で病理研究 金沢大学医学部病理学教授 アメリカのヒル＆ヴィクター調査報告書によれば「・・・・岡本耕造博士によれば、金沢大学にあった病理データは 1943 年に石川博士によってハルビンから持ち帰られたものである。 それはおよそ 500 人の標本からなっていた」と書かれています。 1943 年石川は金沢大学医学部教授となる。 特に流行性出血熱（孫呉熱）の研究で有名。 北野政次の「防疫秘話」の記述では「・・・・流行性出血熱の研究では・・・・昭和 11 年 11 月初旬、トゲダニを朝比奈技師が集め、金沢博士が 11 月 6 日実験し、笠原博士が引継ぎ、11 月 14 日石川博士の病理報告で実験成功を知り、その後笠原博士の努力で病原体がウイルスである事が決定・・・・病理研究は所博士が引継いだ」とあります。 また同調査に対して「ペストは自然の流行の際に集められたものばかりでなく、人工的にペストに感染させ解剖した人から採った標本の数として総数は 180」と答えています。 論文「炎症（殊にペスト）に関する研究」では満州国農安地区ペスト流行に際して、 ペスト屍 57 体解剖を行った。えは体数に於いて世界記録であると自慢しています。 （戦後）1949 年　日本細胞化学会を創設 1954 年　オランダの国際細胞学会に日本代表 1962 年　第６期日本学術会議第７部会員に選ばれる 1967 年　金沢大医学部付属神経情報研究施設長 1968 年　金沢大がん研究所長
＊吉村寿人 	（当時）731 部隊第 1 部第３課長　生理、マルタ管理、凍傷実験、技師４等 731 部隊で人間を使った残酷な凍傷実験を行なったとして有名です。 （戦後）京都府立医科大学学長、日本学術会議南極特別委員 凍傷実験の成果をもとに極地人類生理学の権威となりましたが、自分の実験を戦後も自慢していた事で問題になっていました。1981 年に日本生理学会で行なった講演が問題になりその後学長を辞任しました。 その講演を報じた新聞記事から ◎タイトル「生体実験堂々と講演」 「・・・・日本生理学会で、凍傷研究の生体実験結果をもとに同部隊（注：731 部隊の事）での研究成果を自分の功績として特別講演していたことが明らかになった。 帰国後、関西の公立医大学長などをつとめ、環境適応医学の「大御所的」存在で、この人は戦時下のことだからと弁明しているが、その無神経さに学会内部から厳しい批判が出ており、特別講演の全文を学会誌に掲載した学会の責任を問う声も上がっている。

	A(注:吉村)は・・・・講演の中で 「局所耐寒性（寒冷順応）の比較民族学的研究」という 731 部隊での研究成果を披露した。 Ａは「戦後、ＪＪＰ（同学会発行の海外版学会誌）で発表したところ、国際的に大変な反響を呼んだ」と誇らしげに述懐したという。 1950 年８月から 52 年２月に３回に分けて日本生理学会誌の英文版に部下の飯田敏行との連盟論文「厳冬に対する皮膚反応についての研究」を表した。 そこには日本人、中国人、モンゴル人、オロチョン族の 8～48 歳の男性を多い時には５００人以上使った実験結果が報告されている。 実験は熱電対を指先につけて、指を氷水に漬けさせ、皮膚温の変化を測定し、年齢・人種別に抵抗性を調べた。研究論文によると「浸漬直後より皮膚温は急速に低下し、それとともに局所に激痛を覚え、以後感覚麻痺し４分後に指頭に激烈なる衝撃を覚えた。 このとき、皮膚は白く変色し、かつ温度は急に上昇して局所凍結の起こるのを示す」 また、「3 日目の新生児でも寒冷に対する皮膚血管の反応が観察できた」など、残虐な生体実験ぶりがリアルに記載されている。

＊岡本耕造 	（当時）京都帝国大学出身、731 部隊第１部第６課長　病理研究、技師４等解剖の名手 50～60 人を１人で解剖したと言われる。勲一等をもらう （戦後）兵庫医大教授、京都大学医学部長、近畿大学医学部長
＊関根隆（旧姓安川）	（当時）731 部隊で食品衛生学の研究ペスト研究班 （戦後）水産大学教授、学長
＊草味正夫	(当時）731 部隊資材部第１課長　薬品合成を担当、薬剤大佐 （戦後）昭和薬科大学教授
＊児玉鴻	（当時）731 部隊細菌戦研究班、軍医少佐 （戦後）慶応大学教授
＊根津尚光	(当時）731 部隊コレラ研究班、軍医少佐 （戦後）都立衛生研究所
＊肥野藤信三	（当時）731 部隊【脾脱疽（炭疽）班】、軍医少佐 （戦後）肥野藤病院院長
＊湊正雄	(当時）731 部隊第１部第２課長　コレラ研究を担当、技師５等 （戦後）京都大学教授
＊所安夫	(当時）731 部隊で流行性出血熱の研究班、軍医中尉 （戦後）東京大学教授、帝京大学教授
＊春日仲善	（当時）731 部隊大連支部（通称 319 部隊)、技師５等 （戦後）北里研究所、文部省百日咳研究班員

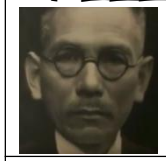
＊篠田統	（当時）731 部隊技師、北京甲 1855 部隊で昆虫学者としてハエやノミの研究 （戦後）大阪学芸大学（大阪教育大学）教授、三重県立医専教授
＊金子順一	（当時）陸軍軍医学校防疫研究室 （戦後）武田薬品
＊大科達夫	（当時）陸軍軍医学校防疫研究室 （戦後）武田薬品
＊小川透	（当時）栄 1644 部隊第３課、腸チフス菌やパラチフス菌で食物や飲み水を汚染する研究に従事 （戦後）名古屋市立大学医学部教授　1952 年に乳児院の孤児を対象に人体実験を行ったとして社会問題になる
＊山中太木	（当時）栄 1644 部隊第１課、チフス・コレラ等腸管系伝染病の専門家で、山中式鞭毛染色法の考案で博士号を取得 （戦後）大阪医科大学長、第 47 回日本細菌学会総会長
＊金沢謙一	（当時）731 で孫呉熱のダニを使った実験に従事、大連衛生研究所研究員 （戦後）武田薬品研究部長
＊藤野恒三郎	（当時）シンガポール岡 9420 部隊 （戦後）大阪大学生物学研究所教授
＊山田秀一	（当時）満鉄衛生技術廠細菌第一部長 （戦後）熊本大学教授
＊早川清	（当時）731 部隊第４部、9420 部隊、ノモンハン事件に参加 （戦後）早川予防衛生研究所経営
＊増田知貞 	（当時）京都帝国大学医学部卒業、731 で石井の片腕、栄 1644 部隊部２代目隊長 （戦後）千葉で開業、交通事故死
＊大田澄 	（当時）731 部隊総務部長、731 部隊第２部長として細菌戦を指揮、栄 1644 部隊部３代目隊長 （戦後）山口県で開業、自殺
＊高橋正彦 	（当時）731 部隊でペストの研究、軍医少佐 （戦後）千葉で開業

＊国行昌頼	（当時）731 部隊病理研究班、軍医大尉 （戦後）日本製薬株式会社で乾燥血漿の製造
＊加藤勝也	（当時）731 部隊 （戦後）名古屋公衆医学研究所
＊川島清 	（当時）731 部隊第 4 部細菌製造・軍医少将 （戦後）八街少年院
＊貴宝院秋雄 	（当時）731 部隊第 1 部で天然痘研究 （戦後）京都微生物研究所
＊工藤忠雄	（当時）731 部隊 （戦後）大阪日赤
＊倉内喜久雄	（当時）731 部隊 （戦後）永寿病院院長
＊小酒井望	（当時）陸軍軍医学校防疫研究室嘱託、軍医中尉 （戦後）順天堂大学浦安病院院長
＊潮国末雄	（当時）731 部隊 （戦後）三重大学医学部病理学
＊鈴木重夫	（当時）731 部隊、技術少佐 （戦後）東京衛生材料研究所
＊瀬尾末雄	（当時）731 部隊 （戦後）三重大学医学部病理学
＊妹尾左和丸	（当時）731 部隊 （戦後）岡山大学医学部病理学
＊浜田稔	（当時）731 部隊、技師 5 等 （戦後）京都大学農学部教授
＊浜田豊博	（当時）731 部隊、技師 6 等 （戦後）香川県衛生研究所

＊平山辰夫	（当時）731 部隊 （戦後）東京都母子保健院
＊三井但夫	（当時）栄 1644 部隊（南京） （戦後）慶応大学助教授
＊宮川正	（当時）731 部隊宮川班班長（レントゲン班）、軍医中尉 （戦後）東京大学教授、埼玉医科大学教授
＊山内忠重	（当時）栄 1644 部隊（南京） （戦後）興和㈱を創設　取締役
＊江口豊潔 	（当時）731 部隊病理研究班、軍医中佐 （戦後）江口病院長
＊大塚憲二郎	（当時）731 部隊 （戦後）国立東京第一病院
＊田崎忠勝	（当時）栄 1644 部隊（南京） （戦後）信州大学
＊谷口典二	（当時）同仁会華中支部、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 (戦後）阪大微生物研究所長
＊西俊英	（当時）軍医中佐、731 部隊教育部長、孫呉支部長兼任 （戦後）西病院長
＊野田金次郎	（当時）栄 1644 部隊（南京） （戦後）信州大学
＊藤野恒三郎	（当時）南方防疫給水部 （戦後）大阪大学微生物研究所
＊目黒康雄	（当時）731 マラリア菌研究班 （戦後）目黒研究所長
＊目黒正彦 	（当時）731 部隊大連支部製造担当 （戦後）目黒研究所

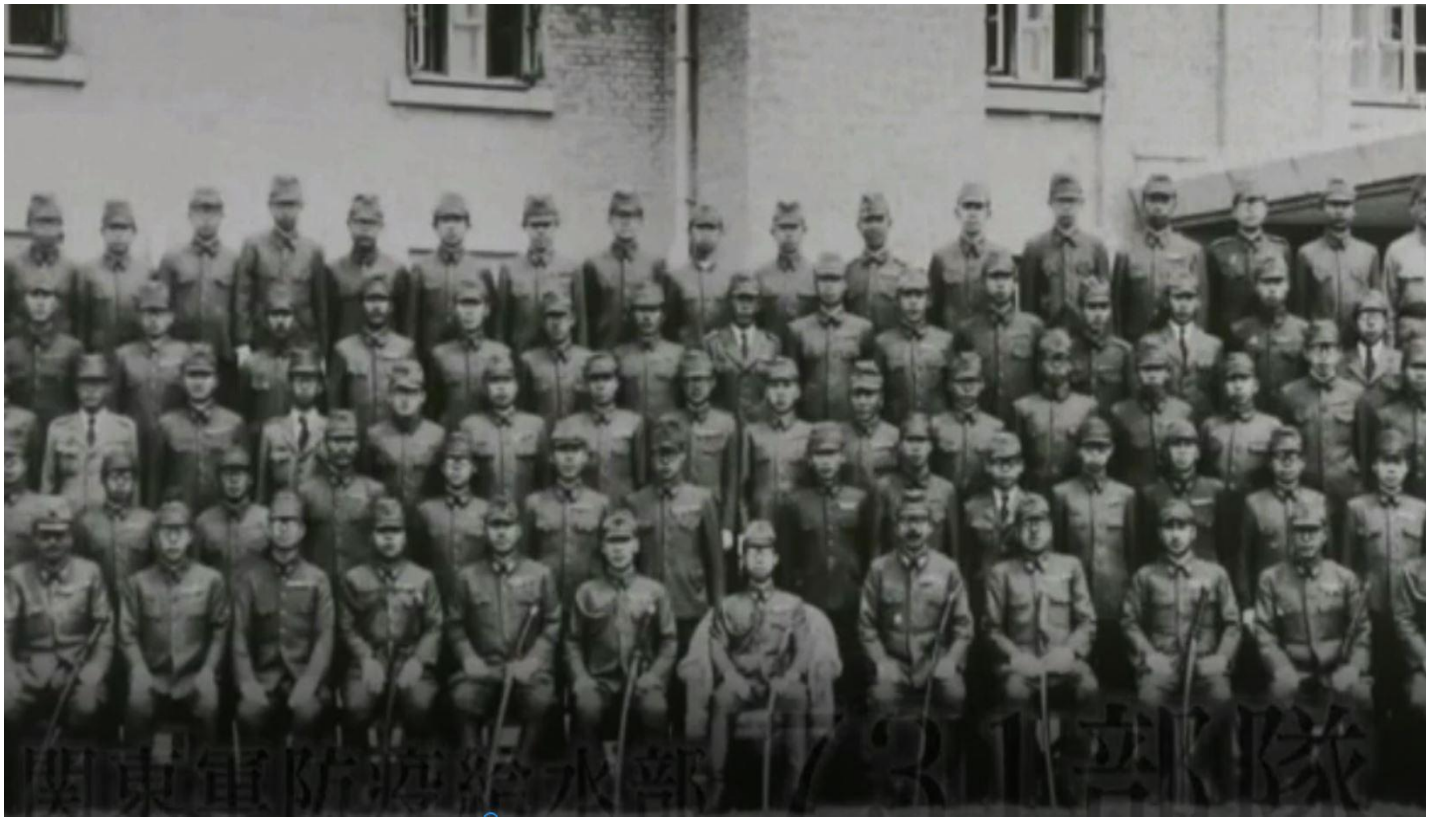
※軍属でも技師・技手は、軍人と同じく軍人恩給の支給対象者であった

次は、陸軍防疫研究室（新宿戸山）や関東軍 731 部隊の嘱託として度々満州 731 部隊を訪れ、研究資金を受け取り、若い弟子たちを軍医・技師として 731 部隊に送り込んだ人。
医師や研究者の社会では、今でもそうですが若い研究者は教授等上司の命令で仕事先が決まります。
ですから細菌部隊に弟子を送り込んだ人も同罪と考えてよいでしょう。

＊宮川米次	（当時）東京帝国大学伝染病研究所第５代所長、陸軍嘱託、同仁会副会長 （戦後）東芝生物物理化学研究所所長
＊緒方富雄	（当時）東京帝国大学伝染病研究所助教授、陸軍嘱託 （戦後）東京大学医学部教授（血液学）、国立東京第一病院
＊細谷省吾	（当時）東京帝国大学伝染病研究所教授、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 （戦後）東京大学伝染病研究所所長、研究業績で朝日賞を受ける
＊清野謙次 	（当時）京都帝国大学教授、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 （戦後）厚生科学研究所長、東京医科大学教授 清野事件 清野は、幼少の頃から考古学を趣味にしており、仕事の傍ら古人骨・古文書・民俗学資料などの収集に情熱を傾けていた。 1938 年に医学博士号を取得した直後、「誠に奇妙なる精神状態」のうえに収集癖が高じて、京都の古寺から教典や古文書を盗む窃盗事件を起こす。 清野は逮捕され、控訴審で懲役２年執行猶予５年の有罪判決を受ける。 このことから清野は京大を免職になったばかりか、濱田耕作京大総長も辞意を表明した。
＊戸田正三 	（当時）京都帝国大学教授（衛生学）、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 （戦後）南極特別委員、金沢大学学長
＊木村廉	（当時）京都帝国大学教授（細菌学）、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 （戦後）日本医学会副会長、名古屋市立大学学長 注：常石敬一氏のインタビューに「誰を送るかは石井の指名によるのではなく、自分の判断であった」と述べています。
＊正路倫之助	（当時）京都帝国大学教授、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 （戦後）第１期学術会議会員、兵庫県立医科大学長（神戸大学医学部）
＊内野仙治	（当時）京都帝国大学教授（生化学）、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 （戦後）京大教授、名古屋市立大学学長
＊谷友次	（当時）金沢医大（細菌学）教授、陸軍軍医学校防疫研究室嘱託 （戦後）金沢大学教授

皇族

＊竹田宮恒徳王（宮田参謀）　天皇の従兄弟である彼は、関東軍司令部によって設置された、731 部隊と 100 部隊の事業の監督をするための特別委員会の幕僚メンバーだった。彼の幕僚メンバーとしての最も重要な責務は、平房や他の支部施設を訪問する許可を与えるかどうかを決定することであった。関東軍のおける医療行政官のチーフのように権力のある個人すら、平房（の施設）に立ち入る際には、竹田宮・宮田が発行した通行証を求める必要があった。関東軍司令官もしくはその直属の部下が 731 部隊を訪れる時は、竹田宮が彼らの一行に混じって彼らをエスコートした。



参考にしたもの

・「おしえて、ゲンさん　細菌戦部隊の戦後」
・「日本の医療の原点　731 部隊の関係者とその後の職業・役職及び厚労省との関係　フクシマと 731 部隊」
・「731 部隊に関与した医師・医学者」（小俣和一郎）
・「飽食した悪魔の戦後」（加藤哲郎）
・「医学者たちの組織犯罪」（常石敬一）
・「検証・中国における生体実験」（美馬聡昭）
・「陸軍防疫研究報告第 2 部」の分析 2 ーその研究に加担した医学者たち（藤昭三）
・「留守名簿　関東軍防疫給水部」（西山勝夫編）
・「死の工場」（シェルダン・ハリス、近藤昭二訳）
・731 資料センター会報第 27 号「衛生学校における生物戦部隊の創設とその挫折？」（奈須重雄）
・科学と学問を "軍事の僕（しもべ）" にさせぬ　加計学園獣医学部問題にも通じる（しんぶん「赤旗」）

※**天皇の弟・三笠宮**も視察していた。